

第2回 鑑賞教育プロジェクト ——「パウル・クレーの芸術」展(山口県立美術館)の題材化——

岡田 匡史* 静屋 智**

The Project of Teaching Art Appreciation, Pt. 2: The Exhibition, "Paul Klee Retrospective."
at Yamaguchi Prefectural Museum of Art as Instructional Resources

Masashi OKADA*, Satoru SHIZUYA**

(Received November 21, 1994)

キーワード：「第2回 鑑賞教育プロジェクト」、「パウル・クレーの芸術」展、鑑賞授業、
主題学習、読解活動、リンク、発達段階

本論では、前年度(平成4年度)の共著論文に続き、「第2回 鑑賞教育プロジェクト」の活動報告を軸に、学校教育の鑑賞教育を諸角度から論じようと思う。

本論の章構成は、以下の通りである。

- I 「第2回 鑑賞教育プロジェクト」の活動概要
- II 展覧会(鑑賞モチーフ)の概観
- III 鑑賞題材化の観点
- IV 鑑賞授業の実践報告と考察
- V プロジェクトを通しての包括的考察

そこで、最初に、「第2回 鑑賞教育プロジェクト」の活動概要を記しておきたい。

I 「第2回 鑑賞教育プロジェクト」の活動概要

「鑑賞教育プロジェクト」は、「美術科教育特論演習Ⅱ(大学院教育学研究科・美術教育専修の授業科目)」に設けた、鑑賞教育研究を総合的に進める活動計画である。

「美術科教育特論演習Ⅱ」では、前年度より、「鑑賞教育」を研究主題に選び、文献講読をベースに鑑賞指導の内容・形態・方法等を諸観点から検討し、さらにその活動を通じて学んだ事柄を基に、鑑賞授業の実践の実現を念頭に置いて、山口県立美術館で5～7月に開催される展覧会をモチーフにしたオリジナルな鑑賞題材の開発を試み、最終的に学習指導

* 山口大学教育学部

** 山口大学教育学部附属山口小学校(山口大学大学院教育学研究科[平4～平5])

案のフォーマットにまとめるという課題に取り組んでいる。なお、前年度は、「アメリカの遺産—絵画の150年」展(1992年5月12日～6月21日)を選んだが、今年度(平成5年度)、選んだ展覧会は、「パウル・クレーの芸術」展(1993年6月1日～7月25日)である。

また、この活動実践にリンクする形で、開発した鑑賞題材の検証を第1の目的とする、鑑賞の授業実践を位置づけ、静屋がその授業実践を担当している。前年度は、静屋が上記授業の受講生であったので、他の受講生と共に演習課題に取り組みながら、演習活動の中で、勤務校である山口大学教育学部附属山口小学校での鑑賞授業の実施計画を練ることができた。しかし、現職派遣の立場であるため、静屋が在籍2年目で教育現場に復帰したため、演習を基盤にした活動展開が難しくなった。そこで、今年度より、演習と鑑賞授業を1度切り離し、「a.演習での鑑賞教育研究」、「b.附属山口小学校での鑑賞授業」の2つの実践が、有機的に緊密にリンクしながら同時展開するような形態を選んで、プロジェクトを進めることにした。両実践の間で情報交換・協議の場をできるだけ多くもつように心がけ、今年度、「第2回 鑑賞教育プロジェクト」を実施することができた。

以下は、プロジェクトを構成する上記2実践の活動計画の概略である。

a.演習での鑑賞教育研究(受講生：隅敦現職派遣/下松市立中村小学校、小田村泰彦、伊藤和子)

(1)鑑賞教育に関する基礎文献の講読(講読内容を補足する講義・スライド鑑賞も実施)

講読文献：ヴァス・プラブ(ロサンゼルス近代美術館・教育部部長)「同時代美術：新しいコンテクストにおける見慣れたモノ」⁽³⁾

(2)フリー・トーク(適宜実施。話題・資料類の提供や活動報告等を含む)

(3)「パウル・クレーの芸術」展をもとにした鑑賞題材の開発(1. 展覧会の鑑賞、2. 図録・画集・参考書籍類や新聞・雑誌・テレビ等の諸マスメディアによる情報収集・リサーチ活動、3. 学習指導案の作成)

(4)鑑賞の模擬授業/題材の検証(授業者：隅、対象者：「美術科教育法 I」[学部の授業科目]の受講生6名)

(5)鑑賞授業の参観と授業記録・指導補助

b.附属山口小学校での鑑賞授業(指導者：静屋、対象児童：第6学年1組[担任：中野政彦先生、児童数=40名]、第6学年2組[担任：吉鶴修先生、児童数=40名]合同で実施)

(1)事前授業(会議室)：「鑑賞ノート」とOHP資料2点・スライド資料23点による導入的学習

(2)実物鑑賞(美術館)：「パウル・クレーの芸術」展の団体鑑賞(作品鑑賞、ワークシート学習、友達間の話合、指導者の個別的な指導・援助や質疑応答等で活動が構成される)

(3)事後授業(各教室)：1. 感想・意見の発表、2. 「クレーさんへの手紙(関連的な表現課題)」の実践

最後に活動成果のまとめとして、a.では学習指導案集の編集、b.では学会での研究発表と論文・授業実践報告の執筆(当論文)を位置づけた。今年度は、a.・b.両実践の総体が「鑑賞教育プロジェクト」だという認識をもって活動を進めた。なお、岡田・静屋は、これまでに個別的にもプロジェクトと関連する研究発表を行ってきた。⁽⁶⁾

Ⅱ 展覧会(鑑賞モチーフ)の概観

「パウル・クレーの芸術」展は、日本でのクレーの回顧展としては最大規模に属するものであり、「バルナツソスへ」等の代表作を含む、初期から晩年までの諸作品(総数=269点、図録掲載数=272点)を集めて組織された、学術的価値の高い展覧会であった。また、ハンス・クリストフ・フォン・ターフェル(ベルン美術館長)によれば、今日、展覧会の開催場所への度重なる作品移送が原因となって、作品のダメージの問題が顕著化してきているた

め、「特別な事情がなければ開催することのできないもの」だ⁽⁷⁾ということである。なお、この問題を招いた重要な1因に、クレアがしばしば実験的精神から脆弱で修復困難な素材や無理な技法で新しい表現を試みたことを挙げることができる。この貴重な展覧会は、愛知県美術館、山口県立美術館、ザ・ミュージアム(東京)の3箇所で開催された。

展覧された諸作品の外観・様態は実にヴァライティに富み、簡単に類型化して整理することはできないが、クレア芸術の特質をよく示す表現として、各時期の個性的な自画像、初期の諷刺的な銅版画や素描類、チュニジア旅行を契機とする水彩画、児童画に似た線の展開、人間・動植物・景色等の幻想的・神秘的な表現、定規・コンパス類を使ったシンプルな幾何学的形態や不規則な分割形態の配置・構成、諸種の線描表現(細い線/太い線、神経質そうな線/プリミティブで奔放な線、単純な線/増殖・交錯する線etc.)、直線・曲線による画面分割、矩形を配置した格子模様やモザイク的表現、グラデーションの縞模様、色面の表現、点描表現、文字・数字や単純な記号的形態による表現等々を挙げることができる。

展覧会ではこれらの作品が年代順⁽⁸⁾にまとめてあり、クレア特有の表現様式の展開・変遷が可能な限り系統的に理解できるように配慮されていた。ただ、受講生の隅と小田村は、作品数が269点と多く、かつ、素材・技法や表現様式が余りにも多様であるため、指導的が絞りにくく題材構想が難しいという意見を異口同音に述べていた⁽⁹⁾。確かに児童を対象とする鑑賞授業の具体的実践を前提に、この展覧会を見た場合、そういう側面があったのは事実だと思う。

Ⅲ 鑑賞題材化の観点

1 主体的な鑑賞学習の1形態：主題学習の試み

「バウル・クレアの芸術」展を鑑賞モチーフとする、今回の授業実践の重要な課題は、抽象的表現が多く一見難解なクレアの絵画芸術を、第6学年の児童にどのような指導法・活動形態で経験させ、その表現の真髄をどう理解させるかということであった。

展覧会は回顧展であり、1人の画家が生涯を通じて制作した諸作品を年代記^{クロノロジカル}的に配列・構成した展覧で、諸作家の作品を網羅した、前年度の鑑賞モチーフである「アメリカの遺産—絵画の150年」展とは本質的に違っていた。そこで、展覧の順番に沿って、クレアの絵画表現の変遷や、その変遷の基盤となった造形理論を、児童に教え理解させるという展開も考えたが、第6学年の発達・活動面の実態(本章4参照)を鑑みて、この展開には無理があると判断した。しかしまた、児童が何の学習もなしに展覧会に接した場合には、ただ漠然と作品を見るだけで、結局、印象が希薄な状態で美術館を出るという事態になりはしまいかと心配した。ここで岡田・静屋が到達した結論とは、事前授業の時間に、児童がクレアの作品を興味関心や問題意識をもって意欲的・積極的な態度で見、さらに自分の力で作品の理解・解釈を深め展開していけるような、基本的な「主題・観点」を学ばせるということであった。

鑑賞教育の指導形態には、基本的に2種類があると考えられる。第1は、オーソドックスな指導形態であり、美術史の授業を展開するタイプである。第2は、児童の主体的な学習展開を保証しようとする立場から、自分の見方・価値観や今ある知識・理解で、作品を自由に見て楽しむ活動の場を設定するタイプである。指導性が強いのは、当然、前者であるが、後者の場合にも、指導を教師側の干渉と捉える観点が過度に先鋭化し、指導を避け放棄してしまう傾向、つまり、放任主義に陥る問題的側面が認められる。そこで、岡田・静屋は後者の問題的側面の改善・解決を図るために、児童の学習実態を無視した知識注入型の授業とは本質的に異なるレベルで、児童の鑑賞意欲を喚起し、作品を楽しくかつ深く見るのに有益な、諸種の基本的な主題・観点を学ばせることにウェイトを置く授業を展開

することにした。その指導形態を、ここでは「主題学習」と呼ぶことにする。

そこで、鑑賞の2種類の指導形態を、「a.美術史学習」と「b.主題学習」とし、両者の要点を簡潔にまとめておきたい。

a.美術史学習：美術に関する諸知識を鑑賞に必要な基礎・前提と考え、作品の諸特質、表現の変遷・展開、作家の人間の側面や影響関係、時代動向・様式・主義等の背景の諸事項etc.の理解に重点を置く。○授業形態：ある作家やある時期の美術動向・表現様式等を取り上げ、客観的史実を範に作品を順番に配して解説・鑑賞する。

b.主題学習：作品鑑賞の主題・観点を学ぶことで、児童の内側に興味関心や鑑賞意欲を喚起し、また、その主題・観点をもち作品を詳細に観察・鑑賞できる能力を養い、最終的には授業後も図書室等で図録・画集・参考図書類を読んだり、また、関連する展覧会を見たりして、知識とより深い理解を自ら求める、自己探求型の学習活動が展開することに重点を置く。○授業形態：児童にとって興味ある解りやすい「主題(1つか複数)」を設け、その主題をもとに諸種の作品・関連資料を集め、それらを美術史に縛られることなく様々に関係づけて、オリジナルな鑑賞授業を構成する。

第6学年の段階では、児童側に鑑賞への興味関心や基礎的な鑑賞能力がまだ備わっていないため、純然たる美術史学習の実施はまだ難しいと言える(本章4参照)。もしそれを実施した場合には、児童の主体性を無視した、知識注入に偏った画一的で受動的な学習展開になることが予想される。児童の学習実態を配慮するのであれば、知識習得よりも、むしろ着眼・発見や想像・思考の発展に重きを置く学習展開を考えるべきであり、したがって、この時期には、主題を軸とする能動的な学習展開が保証できる、主題学習がふさわしいのではないかと思う。

「パウル・クレーの芸術」展の鑑賞題材化にあたり、岡田・静屋が選んだ指導形態は、主題学習である。今回の授業実践では、クレーの業績を美術史的観点から展開のシーケンスに基づいて学習するのではなく、初めに諸種の作品の共通因数を意味する主題を学び、その主題をもってクレー芸術を体験・満喫したり、また、児童自らが諸作品に共通する新たな主題を見つけたりしながら、その真価を諸側面から理解することを目標とした。そこで、今回は、年代順に編まれた展覧会の諸作品を1度ばらばらにして、それらを種々な主題で組み立て直すという活動展開を試みた。

クレーの絵画表現における主題的事項には、素材(鉛筆・インク・墨・絵具や顔料・媒剤類、各種基底材)、技法、点・線・面の性質、シンプルな図形(丸・三角・四角や十・×やハート型etc.)、力・動き・運動を表わす形態的要素、矢印、S字、渦巻模様、植物等の成長を暗示する有機的・装飾紋様の形態、色彩表現、画面分割、ストライプ模様、グリッド模様、色帯のグラデーション(階調の漸次的変化)、点描、文字・数字、フェルマータ等の音楽記号や音楽的要素等々がある。なお、事前授業では、教師が提起する主題は、「線、形、色彩」の3つに絞り、他の主題的事項は児童が自ら発見するようにした。

2 読解活動の重視

前節で、作品を深く理解・解釈するという表現を使ったが、それは作品を読むこと、すなわち読解活動と同義である。研究発表概要集(第16回美術科教育学会)には、作品の読解の重要性について次のように書いた。

「クレーの絵画表現の特質を、児童が自ら積極的に調べ理解しようとする意欲・態度を喚起するために、鑑賞の読解的側面を重視し、活動軸を「絵を見る鑑賞」から「絵を読む鑑賞」にシフトすることにした。1つの試みとして、「成長、運動、力、時間、音楽、言葉(想像・思考・観念)等」のキーコンセプトを表わす、諸種の図解的要素に着目させ、

絵を読む活動を楽しませようとした。⁽¹⁰⁾」

鑑賞を読解活動と認識するとき、前節で使った「主題・観点」は「語彙」^{※キャブラリー}を意味することになる。その観点から、前述した主題学習を、クレーの絵画表現を詳細に読み解き、その諸側面を理解するための、「語彙の学習」と捉えることができる。前節で列挙した主題的事項は、すべてクレー芸術を読み解き理解するための語彙を意味するものである。

ただ、クレーの絵画は抽象的様式で表現されているので、ここで言う読解は、宗教画を主対象とする^{イコノロジカル}図像解釈学的な意味での読解とは異なるが、本質的には同質のものだと考えることができる。その画面には様々な意味・解釈や複雑な思考が積層しているのであり、したがって、鑑賞では諸形態の配置構成や構図等の空間的事象を一瞥的な印象で理解してしまうのではなく、個々のモチーフを読み解く作業が求められることになる。

クレーは絵画を時間的概念で把握しようと試み、その生成過程や時間・運動的側面を経験し理解するためには、「疲れた足が精神の邪魔にならないため」の「1脚の椅子」が必要であると述べている。⁽¹¹⁾なお、岡田は、クレーが重視した時間を要する動的な鑑賞活動を、画面の諸要素を読み解く活動と同義であると理解している。^{フォーマル}形式的な面を^く潜り、表現の背後に何が働いているのかを知ろうとするこの態度は、知識・解釈や言語活動をベースに展開する、児童画の鑑賞・理解にも必要だと考えられる。

最初、クレーの絵画が抽象的であり、それゆえ、児童が鑑賞するには無理があろうかと考えたが、実はクレーの絵画と児童画とは、第1に、外観、第2に、読解を求める語彙・^{ヴィジュアル・ランゲージ}視覚言語、第3に、線が引かれ諸形象が生動し物語が語られ展開しだす、その生成的特質において、深く関連し合っている。クレーが息子フェリックスの幼児期の描画をこよなく愛し、そこから多くの創造的滋養を得た事実がよく知られているが、児童画と似た実質を備えるクレーの絵画は、児童にとっては特別な親近感を覚えさせるものではないかと考え、両表現の共通点をベースに絵画鑑賞が活発に進展することを期待した。

3 鑑賞と表現をリンクする試み(2領域の有機的組織化)

今年度、演習で得た有意義な成果の1つに、岡本芳枝学芸員(広島市現代美術館・教育普及担当)による美術館教育を知ったことがある。岡本氏は、今年度4月より、自美術館の収蔵作品(常設展)をもとに、「ミュージアム・アドベンチャー」と題する小学生向けの鑑賞教室を開始し、これまでに優れた活動実績を残してきている。岡田を初め、受講生全員が、岡本氏の美術館教育に関する論考や、「ミュージアム・アドベンチャー」の活動実践を通じて、鑑賞教育研究の実質的進展に益する多くの事柄を学ぶことができた。なお、「ミュージアム・アドベンチャー」⁽¹²⁾の詳細については、2篇の拙論を参照願いたい。

今回の題材開発では、隅が参加して撮影・収録してきた、「第3回 ミュージアム・アドベンチャー：ストライプ物語」を視聴し、その活動の終盤に設けられた表現課題を鑑賞にリンクする試みを参照した。このプログラムでは、フランク・ステラ「ラッカⅠ」を鑑賞作品に選び、数種の色帯を編み込むようにして複雑に構成した画面、その色彩表現、分度器の半円型を組み合わせたシェイプト・キャンヴァスの形態等を、スタッフが準備した紙の半円型ユニットや色紙を使って、実際に画面を構成してみることを通じて、参加者が追体験的に理解することが試みられた。岡本氏は、材料・用具や目標が低学年の発達段階にそぐわなかったことを理由に、その活動実践は失敗だったと自己評価しているが、岡田は、「分度器シリーズ」における空間構造やシェイプト・キャンヴァスの概念等を小学生に楽し

く理解させる、画期的な鑑賞題材であると高く評価している。

また、演習での講読文献も同時に参照した。講読文献では、ルイーズ・ニーヴェルソン、クレス・オルデンバーグ、ベティ・サー、ミッチェル・シロップの4作家を選び、日常的なモノが各美術表現で新たにどう価値づけられ利用されているかを知ることを主眼とし、4段階の授業設計：Step1「日常的なモノの再認識」、Step2「作品鑑賞」、Step3「比較鑑賞と背景の理解」、Step4「関連的な活動」を提案している。最後のステップで、7種類の課題を挙げているが、その中に次のような表現課題がある。

「4点の中から1点を選び、その作品が制作された年を主題にしてコラージュを制作しなさい。イメージやその年にあった世界的出来事を表す言葉を使いなさい。」⁽¹⁴⁾

そこで、鑑賞授業では、授業の最終場面で、「クレーさんへの手紙」と題する表現課題を設けることにした。前節で述べた読解活動に関連することであるが、クレーの絵画が鑑賞者宛の手紙だとしたら、児童はその言葉が解らないと読めないことになる。また、児童がクレーに手紙を書く場合には、クレーに解る言葉で書く必要がある。ここで言う「言葉」とは、前述した「語彙」、2節で述べた主題的な諸事項を指すものである。この課題も一種の「絵の手紙」⁽¹⁵⁾の実践であるが、その趣旨は、児童が事前授業や展覧会鑑賞で学んだ、クレー独自の語彙＝造形言語を駆使し、作品を見ての感想・意見をクレー的表現様式で表し、その活動を通じて、諸種の語彙を再確認し、クレー芸術の理解・解釈をより深めるというものである。

学校教育の美術教育では、表現と鑑賞の位置づけの問題が議論的になっているが、現在、表現・鑑賞を1セットにして捉える観点や、鑑賞を表現を補助する領域と見なす観点を脱却して、鑑賞独自の重要性を認識すべきだという観点が現れ、平成元年版小学校学習指導要領・図画工作では、高学年での鑑賞指導の独立的扱いが認められた。ただ、それと同時に、表現の優れた題材・授業実践の蓄積を背景に、表現と鑑賞の多様な関係づけを模索することも重要である。今回、岡田・静屋は、表現と鑑賞の従来の位置づけを逆転させて、鑑賞の補助を目的とする表現課題を考えてみた。

4 鑑賞能力の発達段階の配慮

岡本氏は、小論「『美術館教育』の現状—NYの研修に参加して」⁽¹⁶⁾で、研修での講義で知った、鑑賞能力の発達に関する理論を紹介・解説している。ただ、この理論は、描画表現の発達理論のように、各年齢段階での発達様態を調べたものではなく、1個人の鑑賞活動の質的な変遷の傾向を調べたものである。したがって、各時期の児童の鑑賞能力の発達様態を知ろうとする場合には、当理論を小学校段階にスライドする必要があるが、鑑賞面の組織的な発達研究が進んでいない現状にあって、その試みの意義は高いと思える。当理論は、鑑賞題材の構想・開発の指標として、さらには長期的展望に立った鑑賞教育カリキュラムを構築していくための指標として有益である。

そこで、岡本氏による理論の要約を参照したいと思う。

- 第1：物語の段階—作品をじっくり見ようとせず、自分の記憶や経験へ連想が飛躍してしまう。セザンヌの静物画に描かれたオレンジを見て「今朝食べたオレンジは酸っぱかったな」と別の想像を始めるなど、その思考は作品の中に入り込むことができない。
- 第2：構築の段階—作品に接する機会が増えるにつれて、多くの人は美術に関する知識や情報を増やそうとする。また、作品を観察することを心がけるようになる。
- 第3：分類の段階—鑑賞体験とともに知識が増えるにつれて、美術史上の分類などを重視するようになる。作品を見たときに知識のみを話したがることに特徴がある。
- 第4：解釈の段階—美術史、技法などのあらゆる知識を踏まえた上で、自分の感性を加え

て解釈ができるようになる。

第5：再創造の段階—美術に関して熟知しており創造者であるアーティストという存在に最大の敬意を払う。作品と対話するかのような深い思索ができる。

経験的に見て、「第1：物語の段階」が小学校低・中学年の発達段階に相当し、「第2：構築の段階」が高学年の発達段階に相当すると考えられる。そして、「第1：物語の段階」から「第2：構築の段階」までの流れを、小学校段階での鑑賞能力の発達の標準的モデルと見ることができる。無論、理論では「第5：再創造の段階」が発達の最終到達点だが、小学校教育では、鑑賞活動が生活の現実を離れて自立しだす、「第2：構築の段階」をゴールと考えるのが適切なように思える。前述したように、学習指導要領で高学年での鑑賞指導の独立的扱いが認められたが、その判断は理論的観点から見て妥当であったということになる。

鑑賞授業において鑑賞能力の発達の側面を配慮することは基本的事項である。そこで、今回は、上記理論をもとに指導の展開を考えた。まず知識を軸に展開する美術史学習は、「第3：分類の段階」に最も適する学習であり、高学年での実施がまだ難しいと判断した。第6学年であっても、知識を第一義とせず、むしろ「第1：物語の段階」を特徴づける、自由な連想や想像活動の拡張・飛躍等により鑑賞活動が自律的に進展していくことを重視して授業構想を練った。そして、その活動展開をベースに、作品に対する児童の興味関心を広げ、児童が作品の理解・解釈を深めながら、鑑賞活動を自ら構築・展開していくための、基本的な主題・観点を学ばせる、主題学習を構想することにした。

Ⅳ鑑賞授業の実践報告と考察

前回同様、静屋が第6学年の2クラスをお借りして鑑賞授業を実施した。今回、日程調整の問題があったため、実験的試みではあったが、土曜日を使い、下記スケジュールで事前授業・展覧会鑑賞・事後授業の3つを一遍に行うことにした。なお、この授業実践の全体の概要を表す「題材構想図」(図1)を参照願いたい。

(1)事前授業：8時40分～9時40分(60分)

(2)展覧会鑑賞：9時55分～11時15分(80分)

(3)事後授業：11時30分～12時30分(60分)

* 移動時間＝15分

この授業を行う前に、第6学年の実態の概要を把握する目的で、アンケート調査を実施した。以下は、その集計結果である。

○絵をかくことが好きな子：50%、ふつう：45%、きらい：5%

○絵を見るのが好きな子：62%、ふつう：38%、きらい：0%

○これまでに山口県立美術館で展覧会を鑑賞したことがあるか？

0回：10%、1回：15%、2回：20%、3～5回：40%、6～10回：10%、11回以上：5%

この結果から、半数の者が絵を描くことを好み、全般的に絵画表現が好きだということが解った。また、約1/3の者が絵を見るのが好きだと答え、この結果は調査者側の予想を上回った。ただ、美術館での展覧会の鑑賞回数については、5回以下の者が85%であり、児童の家が美術館に近いことを考えると、鑑賞回数がやや少ないように思えた。美術への関心・意識の高揚には、美術館が近くにあるという場所的利便性よりも、家庭・地域・学校等の教育環境の側面が大きく関わっていることが考えられ、鑑賞教育の意義・必要性を強く覚えた。なお、事前授業の前に展覧会を見ていた者は、3人であった。

1 事前授業(図2、図3)

準備段階を設定せず、基本的観点や予備的知識がない状態で展覧会鑑賞に臨む場合、漠

第6学年 「山口県立美術館からのメッセージ」
 —バウル・クレーの芸術—

基礎的・基本的事項	意識発展の筋道	学 習 活 動	個の独自性に対応する支援	
<ul style="list-style-type: none"> 美術作品に親しみ、それぞれのよさや美しさを感じることができていること 自分から進んで美術作品からいろいろな発見をしようとする バウル・クレーの作品は色彩や、線や面の構成などに特徴があることが理解できること バウル・クレーがいろいろな表現材料・技法を用いて制作をしていること 	<ul style="list-style-type: none"> どの絵もたのしいな 線に特徴があるぞ。色彩もきれいだな。 表し方がそれぞれ違うようだぞ 本物に出会って確かめてみたい 	<p>20数枚のクレー展のスライドを見て、印象を書き留める。</p> <p>スライドを見ながら、発見したことや好きな部分について話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○展示してある作品のスライドを見てどのような第1印象を持つか、記入できるワークシートを準備する。記入は「線や形がおもしろいな、色彩がきれいだな、あまり好きではないな、その他の自由な感想」として短時間に記入できるようにする。 ○それぞれの表し方の違いや受ける印象について発表させることによって、自分と友達の感じ方の違いに気づかせたり、新たな発見をさせたりする。 ○油絵、水彩画、銅版画等、多様な描画材料や技法を使った表現を取り上げることにより、新しい作品の見方・感じ取り方ができるようにする。 ○題名が想起できそうな作品については、何が描かれているか話し合い、抽象化された線や面、色彩から描かれているもの・事柄を予想させる。 ○事前に感想を持つことで、「本物に出会いたい」という意欲を高めたい。 	一次 60分
<ul style="list-style-type: none"> 自分の今までの絵に対する印象と本物を見たときの感じの違い それぞれの美術作品のよさに気づくこと 表現方法の違いが分かること 主体的に美術作品に関わり、いろいろな発見をしようとする態度 美術館で鑑賞するときのマナーを知り、守ろうとすること 	<ul style="list-style-type: none"> 紹介されなかった絵もたくさんあるぞ 同じような線や模様が見えてきたぞ 色もスライドで見るよりもあざやかできれいだな 自分の好きな絵はこれだ 本物からだとなんか新しい考えがどンドン浮かぶな 絵を見るのは楽しいな。また来たいな 	<p>美術館で作品を鑑賞し、そのよさを味わう。</p> <p>鑑賞カードに新たに発見したことや感じたことを記入したり、自分の感想をまとめたりする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○事前に鑑賞のマナーについて知らせておき、他の鑑賞者の迷惑にならないようにする。 ○鑑賞の順序は自由とし、気に入った作品はたっぷり鑑賞できるようにできるだけ多くの鑑賞時間を保証したい。 ○事前に学習したことやよさが鑑賞する態度やカードに書き込む内容にどのように生かされているか観察し、対話を通してその子の感じ取ったことを理解するように努める。また、そのことを記録し、3次での「クレーさんへの手紙」にどのように反映しているのかを探る手立てもしたい。 ○熱心に見入ったり、カードに書き込んだりする姿や、新しいことを発見したつぶやきや、カードに記入した事柄からその子なりのよさを認め、賞賛するとともに価値づける。 	二次 80分
<ul style="list-style-type: none"> 自分の発見したことや感想を発表できること 自分の発見したことや感じたことをもとに、自分なりに線や面で構成できること 友達の見方・感じ方のよさが分かること これから進んで美術作品に親しんでいこうとする気持ちがあること 	<ul style="list-style-type: none"> 友達によって感じ方が違うんだ クレーさんにメッセージを送るぞ また、美術館で学習したいな 	<p>お気に入りの「1枚の絵」を発表し合う。</p> <p>鑑賞した感想等を絵や文で「クレーさんへの手紙」として表現する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○1番好きな絵の感想を求め、友達の感じ方のよさや新たな気づきを発見させるとともに、教師が発表者の発言内容のよさや、友達が気づいていない美術館での鑑賞態度のよさについて紹介したり、賞賛したりすることによって、そのよさを実感させ広めるとともに、自信につなげたい。 ○自分の感想を文で表現した後で、自分が見つけたり感じたりした線や形、色を使って「クレーさんへの手紙」として表せるようにする。描画材料は短時間で感じた線や色が表現できるように色鉛筆とする。 ○1人1人の描く内容と記述している内容を深く理解し、その子の表現のよさや鑑賞を通して感じ取ったよさを賞賛し価値づけるとともに他に広める。 	三次 60分

図1 題材構想図



図2 事前授業Ⅰ：「世界劇場(寄席)」のOHP鑑賞の1場面。ビデオ撮影(図2、図3、図8～図13)：小田村泰彦。



図3 事前授業Ⅱ：23点の作品を順番に見ながら、「鑑賞ノート」のチェック欄を記入していく、スライド鑑賞の場面。

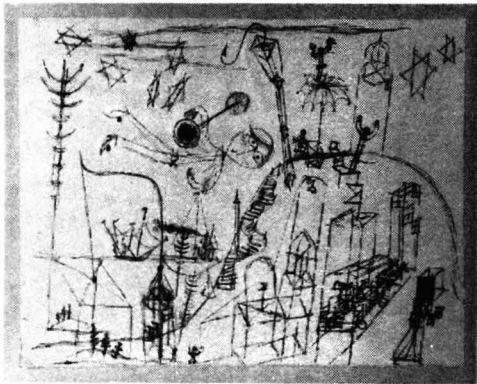


図4 「世界劇場(寄席)」1918年 インク・ペン、厚紙の上に紙 20.4×26.7cm 写真図版はすべて図録より転載。

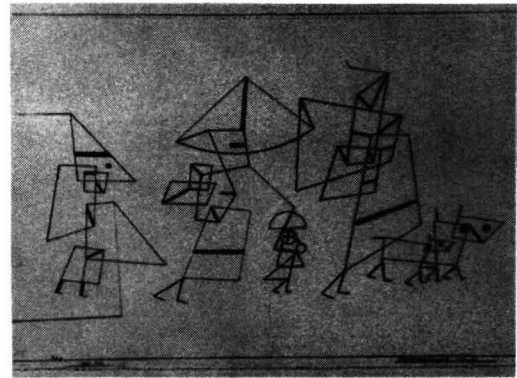


図5 「家族の散歩. テンポ2」1930年 墨・水彩、厚紙の上に紙 40×57cm

然とした意識・態度で作品をただざっと見るという結果になりがちである。特に外国の近・現代美術の場合、その傾向が増す。そこで、表層的な鑑賞活動にしないために、事前授業の重点化を課題とした⁽¹⁸⁾。

事前授業は会議室で2クラス一緒に実施した。まずは児童の興味を惹きつけるため、「クレーさんは1879年生まれですから、もし生きていたら114歳です」といった話をしながら、クレーの年譜を簡潔に解説した。

それから、「世界劇場(寄席)」(図4)のOHP鑑賞に入った。今回の主題は「絵を読む」であるので、この作品に描かれている様々なものを見つけて発表する時間を最初に設けた。児童からは、「凧、傘、バス、馬、猫、魔法陣、道、階段、梯子、星、海、ヨットetc.」と、諸種の発言があった。静屋が画面中央の横になった人物を指して、「これは何でしょう」と質問すると、「人間に見える。飛び降り自殺」という悪戯っぽい答が返ってきた。クレーの絵画表現に顕著な、遠近法・空間的整合性を無視したモチーフの配置構成は、カタログ期(描画表現の4歳頃の発達段階)の典型的表現でもあるが、事象を客観的・合理的に見ようとするこの時期の児童にとって、(想像力の面で問題点を指摘することもできるが)上記の解釈・説明は納得が行くものであったと思える。

発言・質疑応答の後、画面の時間的推移の様子を経験することの重要性を理解させるために、静屋は画面左下隅から斜め上に向かってゆっくりと画面を辿りながら、様々な情景の展開を確認していき、時間・場所が異なる諸場面を同一画面に連続的に表現してしまう、⁰⁹⁾クレアの絵画表現の特質を解りやすく説明した。また、この過程で新たな気づきがあった。

ここで「絵を読む」という主題を黒板に書いた。次に「家族の散歩.テンポ2」(図5)をスライドで提示し、「題名は？何をしている場面？お父さんは？真中のは？1番左にいるのは？etc.」と発問を展開しながら、同じく画面の読み取りを行った。

その後、「鑑賞ノート」(図6。数字を一部誤記。題名を伏せた作品：3、13、22。題名を一部隠した作品：21)を用いた、各時期の特徴的な23点(図7、表1)のスライド鑑賞を実施した。なお、23点は、次の3つの基本的視点を設けて選んだ。

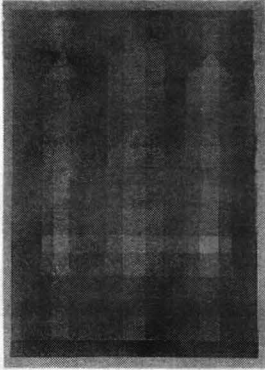
- ①児童が自ら発見できる要素を多く備えたもの[思いのままに感じ味わう鑑賞活動]
- ②実物を見てみたいという期待感・切実感が高まるもの[実物鑑賞]
- ③パウル・クレアの絵画表現の特徴が理解でき、その知識があると鑑賞の価値がさらに高まるもの[主題学習・読解活動]



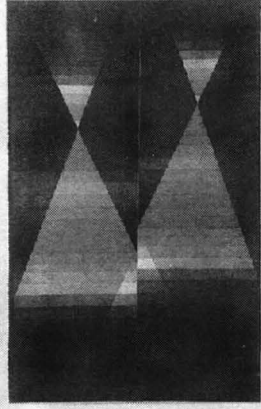
図6 「鑑賞ノート(No1~5)」とワークシート



図7(次頁に続く) 作品一覧(スライド鑑賞の23点)



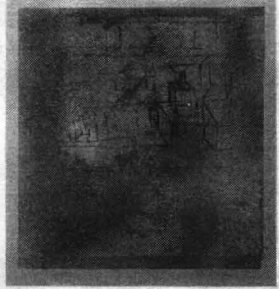
14



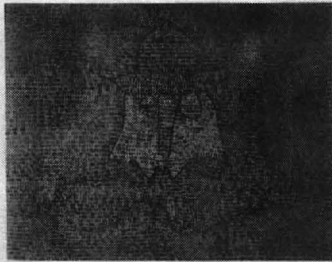
15



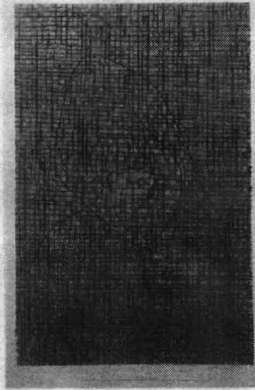
16



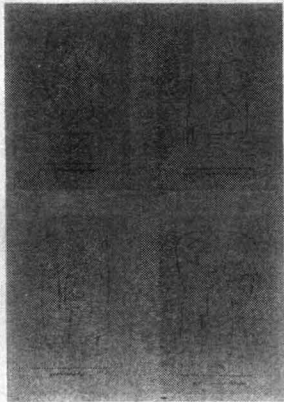
17



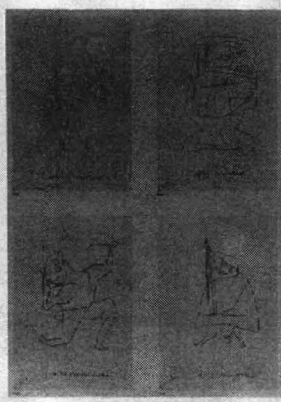
18



19



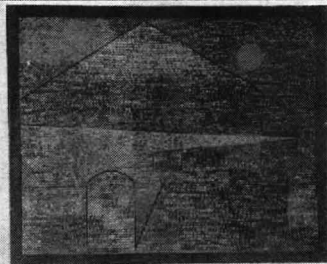
20



21



22



23

表1 作品解説一覧(スライド鑑賞の23点)

1	「年老いた不死鳥」1905年 エッチング、紙 27×20cm
2	「子どもの肖像」1908年 水彩、厚紙の上に紙 30×24cm
3	「カーニヴァル」1913年 墨、厚紙の上に紙 6×17.7cm
4	「ああ、我が苦悩を更に深むるもの、そは我が苦しみを察することなき汝なり。」1916年 墨・水彩、厚紙の上に紙 7×24cm
5	「南方の庭」1919年 水彩、厚紙の上に紙 24.4×18.7cm
6	「月は昇り、陽は沈む」1919年 油彩、板 40.5×34.5cm
7	「雄鶏と近衛兵」1919年 油彩、厚紙 47×40.6cm
8	「バラの風」1922年 油彩、厚紙の上に紙 42×48.5cm
9	「あちらへ」と憧れる寺院の壁画」1922年 水彩・油彩転写素描、厚紙の上に紙 26.7×37.5cm
10	「夕景の分析」1922年 水彩、厚紙の上に紙 33.5×23.5cm
11	「当惑する場所」1922年 水彩・墨・鉛筆、厚紙の上に紙 32.8×23.1cm
12	「玄関先の階段に立つ少年」1923年 油彩・墨、厚紙の上に紙 24.5×18.2cm
13	「つなわたり」1923年 水彩・油彩転写素描・鉛筆、厚紙の上に紙 48.7×32.2cm
14	「三つの塔」1923年 水彩、厚紙の上に紙 33×23cm
15	「二重テント」1923年 水彩、厚紙の上に紙 50.6×31.8cm
16	「オリエンタルな悦楽の園」1925年 油彩、厚紙 40×52.1cm
17	「町の前に立つ子どもたち」1928年 水彩・油彩転写素描、厚紙の上に紙 32.2×30.4cm
18	「コール神父」1932年 油彩、合板 50×65cm
19	「喪に服して」1934年 水彩・墨、厚紙の上に紙 49×32.1cm
20	「未熟な天使」1939年 鉛筆、厚紙の上に紙 29.5×21cm 「天使族の控え室にて」1939年 鉛筆、厚紙の上に紙 29.5×21cm 「おませな天使」1939年 鉛筆、厚紙の上に紙 29.6×21cm 「幼稚園の天使」1939年 鉛筆、厚紙の上に紙 29.5×21cm
21	「エイドラ：かつてのハーブ奏者」1940年 石版クレヨン、厚紙の上に紙 29.7×21cm 「エイドラ：かつてのピアノ奏者」1940年 石版クレヨン、厚紙の上に紙 29.7×21cm 「エイドラ：クナイエロス、かつてのティンパニー奏者」1940年 石版クレヨン、厚紙の上に紙 29.7×21cm 「エイドラ：かつての音楽家」1940年 石版クレヨン、厚紙の上に紙 29.7×21cm
22	「星と結ばれて」1923年 水彩・鉛筆、厚紙の上に紙 32.5×48.5cm
23	「バルナツスへ」1932年 油彩、麻布；着色されたオリジナルの額縁 100×126cm(額寸109×135cm)

鑑賞ノートには、鑑賞作品23点のコピーと、各作品に対応した記入欄を載せた。記入欄は、4項目に関する感想を3段階評定尺度法でチェックする欄(表2参照)、および、発見事項を記入する欄(表3参照)でできている。

このスライド鑑賞では、多くの種類の作品を鑑賞し、各特徴を直観的に把握・確認していく中で、クレア芸術の鑑賞にとって有益な諸種の主題・観点を学習し、その主題・観点をもって自分なりの方法で展覧会の諸作品を見て楽しみ、そのよさを能動的に解釈でき価値づけられる基礎的鑑賞力を養うことを目標とした。

スライド鑑賞は順調に展開したが、児童との意思疎通ができていなかったせいもあり、活動が騒がしく、授業に集中できない児童を注意しなければならない場面が何度かあった。鑑賞授業のみならず、授業活動の最も重要な基盤は、教師・児童間の親密な人間関係であることを改めて痛感した。

活動の概要については、「感想チェック」の結果を集計した表2、発見事項をまとめた表3を参照願いたい。各事項で高い評価(◎が18以上。* =25)を集めた作品は、下記の通りである。作品番号6、23の2点の評価が全項目で飛び抜けて高かった(なお、諸般の事情で、回収できた鑑賞ノートの数は、25[全体の約3/1]であった)。

○線：1、6、10、12、23

○形：1、6、9、12、22、23

○色彩：4、5、6、10、14、15、18、23

○全体から受ける印象：1、6、12、23

表2 「感想チェック」4項目の集計結果(回収数：25)

	線			形			色彩			全体から受ける印象		
	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△
1	21	4	0	19	5	1	6	14	2	21	4	0
							無回答= 2 斜線= 1					
2	7	10	8	13	11	1	17	3	4	15	8	2
							無回答= 1					
3	7	15	3	13	6	6	0	9	14	6	12	7
							無回答= 1 斜線= 1					
4	9	14	2	13	8	4	25	0	0	14	10	1
5	5	11	9	12	11	2	23	0	2	12	11	2
6	21	4	0	21	4	0	23	2	0	25	0	0
7	9	12	4	11	10	4	13	9	3	10	12	3
8	8	5	11	10	9	5	14	6	4	11	9	4
	無回答= 1			無回答= 1			無回答= 1			無回答= 1		
9	14	11	0	18	6	1	11	12	2	16	8	1
10	18	7	0	13	9	3	23	1	1	17	8	0
11	17	5	3	15	8	2	16	8	1	13	10	1
							無回答= 1					
12	18	4	2	21	2	1	13	10	1	20	3	1
	無回答= 1			無回答= 1			無回答= 1			無回答= 1		
13	11	11	2	7	12	5	4	11	8	5	15	3
	無回答= 1			無回答= 1			無回答= 1 斜線= 1			無回答= 2		
14	11	13	1	15	8	2	21	3	1	16	8	0
							無回答= 1					
15	10	13	2	16	9	0	25	0	0	17	8	0
16	6	13	5	11	7	7	15	8	2	12	10	3
	斜線= 1											
17	7	10	7	6	13	5	8	12	4	6	14	4
	無回答= 1			無回答= 1			無回答= 1			無回答= 1		
18	15	7	2	12	9	3	19	4	1	17	6	1
	無回答= 1			無回答= 1			無回答= 1			無回答= 1		
19	10	10	5	5	13	7	12	5	8	5	15	5
20	10	12	3	6	12	7	0	6	16	4	15	6
							無回答= 1 斜線= 1 ?=1					
21	11	14	0	10	13	2	1	9	12	6	17	2
							無回答= 1 斜線= 1 ?=1					
22	10	12	2	18	6	0	15	8	1	17	6	1
	無回答= 1			無回答= 1			無回答= 1			無回答= 1		
23	22	2	0	23	1	0	23	1	0	24	0	0
	無回答= 1			無回答= 1			無回答= 1			無回答= 1		

感想チェック：
 ◎すてき、おもしろい
 ○まあまあ好き
 △あまり好きではない

表3(次頁・次々頁に続く)「発見したこと」一覧 a.: IV-1, 3で紹介した児童の記述。

b.~y.: 組・出席番号の順番に列記(無記入の児童もいた)。

1	1組: a.不死鳥っていても、鳥は、羽があるのに、羽がないけど、想像するとおもしろい。b.不死鳥の持っている「つえ」のようなものの先っぽの仮面のようなものもおもしろいと思いました。e.なし。g.人間の体みたい。h.鳥なのにたっている。i.形がよくわかる。k.色が、黒と白だけで書いてあって、おもしろい。2組: m.手が羽みたいになっている。n.羽や毛がない。o.形がおもしろいし、とてもりっぱに見える。p.銅はんが。s.鳥の目がかがやいていて、体の中の線がいい。v.手の先がおもしろい。w.たくましいー! x.つえの先が不死鳥の顔をしている。y.手の動きが細かいのによく書かれてある。
2	1組: a.茶色みたいな色と白で、とてもかんじがでて、とてもいい具合になっている。c.はつきりしていない。e.色彩がいい。g.色づかいが、やすい所やこい所がいい。i.色彩がいいと思う。k.えんぴつで下書きしていない所が、やさしい感じ。2組: l.明るい所と暗い所がよくわかる。n.かけをうまく書いている。o.子どものかわいさを感じがでていて、色をカラーにするよりもいいと思う。やわらかい線が、とても印象的。q.線の書きぐあい、色、かけのつけ方が、とても、気に入った(あと、しわも)。r.明るい所と暗い所が、うまくあらわされている。s.子どもの目がかわいさ。u.線がはつきりしていない。v.下書きを全然していない。w.線がばやけてる。x.子どもの目のひょうじょうがいい。y.色のぬり方がうまい。
3	1組: a.なんかよくわからない絵だけど、形がおもしろい。b.とても楽しい感じがする。c.なにをしているのか分からん。e.なし。g.たいそうをしているみたい。i.よくわからない。k.いろんな形があつて、おもしろい。2組: n.ふつうではできない形がある。o.見たしゅんかんは、よく何かかわからないけど、とても楽しそう。q.えんぴつで、かいた、線みたい。s.体のうねりがいい。u.なんだか、ごちゃごちゃしている。w.なんかかわからない。x.ひとの形がいい。y.とても動作が大きく書かれている。
4	1組: a.なんか、絵の中に、言葉が書いてあって、おもしろい。b.外国語があつてあるし、その語ごとに色がちがって、カラフルだなと思いました。d.アルファベットがかいてある。e.えいもじがある。g.絵の中に文字がかいてある。左に人みたいだから、自分のことばがかかかされてと思う。h.英語がかいてある気がした。i.よくわからない。j.アルファベットがかいてある。k.ドイツ語が、絵の中に入っている。2組: l.英語がふくまれている。m.字がかかかっている。n.アルファベットが入っている。o.色があるけど、あまり明るい色ではないので、なんだかとてもきれいな。q.英語(アルファベット)がかいてある。r.いろいろな色があつてかかれてる。s.ドイツ語がかかかっている。t.アルファベットが書いてある。u.ドイツ語(アルファベット)が書かれている。v.絵にアルファベットが書いてあり、おもしろい。w.線がばやけてる。x.苦悩というものをよく現わしている。y.アルファベットが絵の中に入っている。
5	1組: a.色の使い方がおもしろい。b.ケッコウ、めちゃうちゃという感じがけど、色使いや形がどれもおもしろい。c.色どりがあざやか。e.火山らしきものがある。g.とても、明るい色づかいでいい。h.色がステキ! i.よくわからないけどカラフル。k.色をにじませている。下書きをしていない? 2組: m.黒色で“はち”らしきものがある。n.人の顔みたいのがある。色づかいがユニーク。o.とても明るい色で、たくさん角がやわらかい感じがでている。q.色がカラフルでいい。すみのへんは、くらくて、真ん中になるにつれて、あかくなっている。色を花や、木に、たとえていて、みたい。s.火山みたいな物や、いそぎんちゃくみたいな物がある。t.すごく明るい良い絵。u.明るい色をたくさん使っている。v.色は全体的に明るい色が使われている。w.さっきより明るい色をしている。x.あかんな色が多し線がない。y.いろいろな色が使っている。
6	1組: a.いろいろなかかれていて、たのしい。b.色のおし方の変化や大きな月が合わさって、とてもすばらしい作品だと思ます。c.すっぱらしい。d.ぬりかたががらう。g.周回とは、対しように、月の明りがきれー。h.やじるしがあつた。i.とてもいいさくひんと思う。j.カッチョーイ。k.色使いなど、とてもきれいで、感じがいい。2組: l.矢じるしが書いてある。m.色がたくさんあつてある。n.上の方に☆みたいのがある。o.月と、陽が、とても目立ってかきかたいことがよく分かる。q.月の、色が、とても、きれいな。月が、のぼり、陽がしずむという、アイデアがいい(月といっしょに、太陽がある、ということ)。まわりに、木々が、いっぱいある。r.矢じるしが書いてある。s.月があり、太陽みたいな赤い物が沈んでいる。t.いろいろな色があつてあつてユニーク。u.いろいろな色があつてあつてある。v.月と太陽が明るい色で書いてあるのですぐ目につく。下の方の矢印はなんなんだろう? w.ま女ができてきそうな絵でおもしろい。月がきれー! x.月の昇る時にも陽がある。y.細かい所もていねいに書かれてある。
7	1組: a.色が、こいい。おんどの色が、いろいろ使ってある。b.雄鶏や人の体の形や色がとてもたのしいかんじがします。d.色がよくない。e.なし。g.この絵は、全体的にくらいイメージがあるけどとてもいい。i.おんどの色が、いろいろある。j.おんどの色もいろいろある。k.人など、いろいろな物がかいてある。2組: l.人が書いてある。m.赤い服をきた人が2人いる。n.人のかげが真ん中あたりにある。o.色がばやけていて、不気味なかんじがする。q.何となく、古い、外国えいのが、イメージが、かんじられる。s.くろっぽかった。u.色が、ばやけてる。v.色あいがとてもきれいな。w.なんか、こわい。x.人が鳥に近づこうとしている。y.色の使い方がうまい。
8	1組: a.バラみたいな花を風みたいなのがさげてるような気がする。b.中心のバラのようなものが何か赤いものを出しているような感じで、何かつたえたいんじゃないかと思ます。e.花らしき物がある。g.やじるしで、物の、するどい、うごきを表しているみたい。i.まん中に花がある(バラ)。k.花のくきに、とげがあるので、“バラ”? 2組: l.ばらが書いてある。n.時間が関係しているかも。o.なんか、戦いみたいなかんじがする。矢がいろいろとんでるみたい。暗い赤が、とても絵をきたてていてみたい。q.このえいにも、やじるしがある。何だか、くらい、イメージが、ある。r.花のまわりに風がふいている。s.花のくきにとげがあるのでバラかも…。u.やじるしがたくさんある。v.中央に花があり、全体的にとて赤い。w.戦争みたい。x.太陽に花がさくよう。y.矢印の方向に色をぬっている。

9	1組：a.やじるしみたいなのがいっぱいあって、月と太陽などがある。b.家の屋根の形が、矢印のようになっていて、とても面白い作品だと思いました。c.おもしろーい。e.やじるしがたくさんある。g.やじるしで、方こうを表しているのがおもしろい。h.やじるしがいっぱいある。i.かけをかいている。k.矢印がたくさん書いてある。2組：l.建物のかけがある。m.やじるしがたてももの屋根みたいに見える。n.線がかさなりあっていて楽しい。o.矢印がたくさんあって、なんか楽しい。うすぐらい色が使ってある。q.やじるしが、いっぱいある、わけが、わからないような、型が、とてもいい。よく、ゆうめいな、えかきが、かくような色だ。s.やじるしの太さが色々ちがう。u.やじるしがたくさんある。v.矢印が7つぐらい使われ、太陽、月が書いてある。w.やじるしみたいなのがいっぱいあっておもしろい！x.しゅうきょうがいっぱいある。y.矢印がとても多く使ってある。
10	1組：a.やじるしがかいてある。色がきれい。b.矢印の方向へ行くにつれて、どんどん色がうすくなっているのが、とてもいいと思います。c.なかなか。e.なし。g.日も(の)ほり月はしずむってかんじ。h.いろんな色があってス・テ・キ。i.しきさいがいい。k.少しずつ色が層になって、だんだん変わっている。2組：l.色がまん中にいくほどうすい。m.色がにじみたいですごくきれい。n.ほんとうに分析してるみたいだ。o.少しものたりないような絵だけど、色や形がすてき。q.このえにも、やじるしがある。上と、下が、くらく、だんだん、真ん中に、あたるとつれて、あかるくなっている。r.色がびみようにちがう。s.色の変化がおもしろくてきれい。u.色の、こい・うすいがはっきりしている。v.色がとてもしんびてき(?)な感じ。w.あのやじるしは、なんだろう？x.一日みたい。y.うすい色を使い分けている。
11	1組：a.色など、とつてもきれい。b.色の使い方はいいけれど、よく意味が分からなかったです。c.おもしろそう。e.なし。g.この絵は、私からみると、原ばくがおちて、平和な町から、ふこうなまちにかわる。i.よくわからない。k.真ん中に、線だけで何か書いてある。2組：l.まん中は建物にみえる。m.真ん中のやじるしの中に何か、書いてある。n.いじげん空間みたいだ。o.真ん中の矢印が目立っている。q.これも、やじるし、が、ある。r.部屋の中に見える。s.真ん中にあるのは日の丸…。u.明るい色が使っていない。v.暖かい感じがする。w.線がはっきりしていない。x.谷に落ちるみたいだ。y.矢印の使い方がうまい。
12	1組：a.なんか、よく分からない絵(表したいことは、分かる)。b.とても面白い表現がしてあってとてもいい。c.楽しい絵。e.うしろに大きな家みたいなものがある。g.あのえは、自分の孫が、まっているらしい。i.とてもいいさくひんと思う。j.カッチョイ。k.いろんな形で書いてあって、おもしろい。2組：l.時計みたいなものがある。m.三角や四角の中にまと(まど?)がかいてあっている(とけいもある)。n.いろんな形がある。o.家が、バラバラになっているようで、色もすてきでおもしろい。q.上の方に、とけいみたいなもの、ある。s.まどのあたりは赤い。t.真ん中の所に横断歩道。u.○、△、□、◇などいろいろな形が使われている。v.色々な図形を使って書かれている。w.頭が石みたいでかわいい。x.少年の家をこわくかいている。y.○や△などの形を使っている。
13	1組：a.あまりおもしろくない。b.人がつなわりをしているよう。c.分からない。e.なし。g.人が上でつなわりしてるみたい。i.つなわりをしている。k.わけがわからない印象がある。2組：m.つなわりをしている。n.線が重なりあっている。o.つなわりのようなものだったら、もっと明るい色でもいいのではないかと思った。q.上、下だけが、くらいいろ。s.何かよく分からない。u.立体的だ。v.1目見て、サーカスのような感じだった。w.魚つりしとるみたい。x.落ちるこわさをあらわしている。y.なにも思わない。
14	1組：a.本当に三つの塔を表しているし色もきれい。b.色の使い方がよくて、すばらしくきれい。e.なし。g.3つのとうが、そびえたっている。h.とつてもステキなとうだ。i.三つのとうがよくわかる。k.色々な色を使ってあって、おもしろい。2組：m.色がすごくきれい(いろんな色がつかってある)。n.いろんな色がつかってある。それだけはやけてみえる。o.あまり、すごい物はないけど、色がとてもきれい。q.すきとおったような、きれいな、色。s.やじるしが3つ。t.きれいな色がつかわれている。u.すごくきれいな色。v.チェック模様の中に、三つの塔が書かれている。w.すごくきれいな色。三つの塔がきょうそうしている。y.線や色のぬり方がうまい。
15	1組：a.色のつかい方などとてもよい。きれい。b.テントの色がカラフルでとてもキレイ。e.なし。g.14のさくひんと同じように色彩がしてある。h.とつても色がいい。i.なし。k.形がとてもおもしろくて、色がきれい。2組：l.色がたくさん使われている。m.テントが重なってる所が色がちがっておもしろい。n.色を分けて使っている。o.1つ1つの色が、変わって、明るい色・暗い色がすてき。q.このえも、すきとおった、いろをしている。14のえよりも、くらい色をしている。s.色がきれい。t.ピラミッド。u.くらい色・明るい色、両方が使われている。v.バックが黒く、テントが明るいのでういて見える。w.くらい色をしている。x.二つのテントは色が強い。y.りったい的でとてもじょうず。
16	1組：a.色の使い方、こいところとうすいところが、はっきりしている。b.何だか、たくさん家のまわりにキレイに広がる野原のようなものがとてもやさしいかんじ。e.町みたいになっている。g.線がなくなってきたみたい。h.くらい。i.家みたいなものがある。k.形ははっきりしていないが、とてもきれいで、大好きな絵になりました。2組：l.色がテンテンぬりにしてある。m.たてものが所々みえる。n.点々ぬりで火事？でぼやけるように見える。o.色のぬりかたがおもしろい。絵がはじけるようなかんじ。q.形が、よくわからないような、所が、いい。まわりの、むらさきの色が、真ん中の、えに、あっている。r.夢の中の町みたいだ。s.たてものがかくれているみたい。u.夜の町みたい。v.色が細かくぬってあって、中がぼうつと光っているみたい。w.夜の町みたい。x.天夜の町みたいだ。
17	1組：a.夕方みたいなかんじがする。b.夕焼けのようなまわりの色がとてもキレイだと思います。c.かんじがでている。e.ゆうがたみたいなかんじ。g.色からみて、夕がたか、朝かと思う。h.夕方にみえた。i.子づれの人がいる。k.とても、かっこいいけど、少しさみしい。2組：m.夕方、人が家にかえってるかんじがする。n.なぜ家はぬらずに回りをぬったのか。o.さみしいようなかんじがする。q.いろが、

	その時間を、よく、あらわしている。色が、ついている方が、とても、きれい(あらわし方)と、思う。s.夕焼けのきれいさ。u.夕方をあらわしているようだ。v.少しさみしい感じ。w.夕方みたい。x.いっぱいある家の中にさまよっている。
18	1組：a.とても、ていねい。b.たくさんのタイルをくつつけて、とてもいい感じをだしている。c.だいなみつく。e.かきかたが、レンガしきになっている。g.この辺りから、もざいくえになっている。h.まわりに点々がたくさんある。i.人みたいなものがある。k.レンガの上に模様を書いてあるみたい。2組：m.今までは、人が小さかったけど、人が真ん中に大きくかかっている。n.モザイクで、ほんのりした感じをうける。o.絵が、点々になっている。神父の絵がすてき。p.いままでとは、書きかたがちがう。q.なぜ、横線が、はいつているのだろうか。s.タイルをしきつめたみたい。t.すごくていねい。u.細かい絵だな。v.モザイクが使っており、細かい。w.がいてこつみたい。x.コール神父がなやんでいる。y.今までは、書きかたがちがう。
19	1組：a.あみあみぬっているかんじ。かんじがくらい。b.よくわけはわからないけど、顔の色の変化がとても良い。c.おもしろい。e.なし。g.もざいくのいれかたが、こまかい。h.かなしんでいる絵みたいだ。i.モザイクをつかっている。k.気持ちが悪い。でもいっしょうけんめい書いている。2組：m.人物のりなかくなどが一筆で書かれているかんじがする。くらいかんじでさみしい。n.周りと同じような色をつかっているのは、はっきりしない。o.色がくらくて、真ん中の人が、とてもかなしそう。p.モザイク。q.色が、ついてない方が、はっきり、みえる。これは、たてと、横に、線が、入っている。r.だるまみたい。s.女の人の顔みたい。青いからかなしんでいるかも。t.かなしそうな顔をしている。u.くらいい絵ですね。v.おそう式なんかで、下をむき、さみしそうに見える。w.わけがわからない。x.苦しんでいる人を現している。y.色のぬり方がとてもいねい。
20	1組：a.よく分からない絵。形がたのしい。b.線だけで書いているけど、運動が面白い。c.分けが分からない。e.ようちえんじがかいたみたい。g.こんな、天使になりたいのかな？h.形がおもしろい。i.ようちえんじなみ。k.なんか、わけがわからない。色が、黒白。2組：n.天使というより、鳥に見える。o.線や形がおもしろい。q.とても、形が、おもしろい。s.小さい子のらくがきみたい。u.よく分からない。v.「天使」を主にしていると思う。w.よくわからん。x.むかえの天使をそのままをえがいた。みじゅくな天使というのはクレーさんかも。y.とてもおもしろくユニークな絵。
21	1組：a.はくりよくがある。b.色々なカッコウの人がいて、面白い。c.へん。e.20と同じ。g.かつてとかいてあるから、死んだ人のことかな？h.形がおもしろい。i.ぜんいんどうぐをもっている。k.左下の絵の形がとてもおもしろい。2組：n.なにをもっているのか分からない。o.楽器をもっているようなかんじ(音楽)。q.これも、形が、おもしろい。s.絵がかわい。u.よく分からない。v.オーケストラをしているみたい。w.よくわからん。x.みんなひょうじょうがある。y.線がとてもおもしろい。
22	1組：a.いろいろな形があつたのしい。b.色の出し方がとても不思議な感じがしました。人がたくさんいて、みんな手を上に上げている。c.ハイ、つかみはOK。e.おもしろい。g.四角形や丸やかたちが多い。h.しかくやばつが多い。i.モザイクをつかっている。k.色がとてもきれいで、何かをうったえようとしているのかな？2組：人がいっぱいいる。n.人のよろこびを表しているのは。o.角ばつたような絵。色彩がすてき。q.色が、きれい。色がついてないのを見ると、人が、手をあげているみたい。r.人間が、ばらばらになっている。s.人が喜んでいておどっているようす。u.色をたくさん重ねている。v.人がたくさん書きであり、手を広げている。w.キャンプ・ファイヤーをしているみたい。x.天使がいるみたい。y.線の使い方がとてもうまく、同じ色をうまく使い分けている。
23	1組：a.いろんな色が使つてあつて、とてもたのしい。形もよい。b.色の出し方がすごくいいと思います。c.ビューティフル。e.すごくきれい。g.もざいくが、きれ一につかっている。h.とてもいいふうけい。i.すごいビューティフル。k.何が書きたいのかがよくわかる。2組：家の形がみえていろんな色をつかっているけどもざいくできれ。n.青っぽい色と、赤っぽい色ばかり使つて。o.たくさん色が点々と使つてある。とても印象的。q.これも、線がはいつている(たて、よこ)。よく、コマーションなどで、見る、何だか、家があつて、太陽が、あるみたい。s.ピラミッドみたいかな…。u.とても細かな絵だな。v.モザイクがたくさん使つてあり、中央に大きな山がある。w.CMにでているような気がする。x.自分が天国に行くみたい。y.一つ一つのぬり方に心がこもっている。

最後に、児童が展覧会鑑賞に対する期待や問題意識を明確にしておくことが必要だと考え、ワークシート(図6。鑑賞ノートと一緒に綴じた)も準備し、児童は1.の項目「美術館でどんなことを見てきたいか、どんなことを知りたいか、書いておこう。」に答えた。ある児童は次のように書いている。

「クレーさんのかいた絵で、意みのわからない絵があるかもしれないけど、先生がいった、絵を読むと、いうことを大切に、いみのわからない絵は、じっくりみて、その絵がわかるようになりたいし、クレーさんが、書いた絵で、色の使い方などもよく見たいと思う(原文のまま。図6参照)。」

2 美術館での実物鑑賞(図8～図11)

美術館に行く前に、移動時の団体行動と基本的な鑑賞マナーに関する指導を徹底した。

の前にして、ある者は床に寝そべって、ある者はスロープの手摺にもたれて、また、ある者は休憩用ソファに腰かけて課題に取り組んでいた。これだけ自由な活動が展開できたのは、前年度の鑑賞授業でも諸面から御支援して下さった、足立副館長の当プロジェクトに対する深い御理解があったからである。

静屋は、思い思いに活動する児童の中に入って、その言葉に耳を傾け、その表情や態度を仔細に観察しながら、児童の鑑賞活動を様々な角度から賞讃し価値づけ、また、次の事後授業に備えて綿密な授業記録を取った。

また、岡田は、自然に集まった男子児童3人と一緒に鑑賞して回り、結果的に個別的形態による鑑賞指導を経験することができた。岡田の質問に児童が答えたり、岡田が児童の着眼・発見等を受けて、それと関連するポイントや新しい側面を解説したりすることで、児童の内側に知的興味が育ち、意欲的な鑑賞活動が進展することを望んだ。実際、3人は岡田の話真剣に聞き、初めて知った事柄に時に驚き感心しながら、作品の見方・楽しみ方が次第に解ってきた様子で、例えば「魔訶不思議」の鑑賞では、「ビックリマーク(1)」の発見を契機に、この作品が様々なマークを使って表現されていることに気づき、また、クロス＝ハッチングを「線が一杯だ」という言葉で理解していた。自分達で画面を構成し特徴づける諸種の側面を捜し、その造形的意義を諸角度から考える活動が活発に展開し、主題学習の深まりが確認できた。この貴重な指導体験を通じて、岡田は次の諸点を学ぶことができた。

- ①児童との心の通い合い・信頼関係が授業活動の大前提であること
 - ②小人数によるオリエンテーリング形式の指導形態が効果的であること
 - ③実物鑑賞では、素材・技法面や細部の緻密な観察に基づく指導・対話が可能であること
 - ④明確な目的意識と鑑賞活動に対する意欲的取り組みが、結果的に児童に多くの知識・理解を得させること
 - ⑤指導者の興味関心・問題意識の大きさが、児童の鑑賞態度に大きく影響すること
 - ⑥高度で難解な事柄であっても、指導者の語り方・表現次第で、児童は楽しく学び理解できること
- ワークシートを集計した結果、児童が1番気に入った作品は、授業・展覧会で「バルナツソスへ」が最も多かった(授業：10、展覧会：7。2人が両項目に当作品を挙げた)。なお、この作品は様々な場所に貼られたポスターや閲覧用に準備した図録の表紙に使われ、上記結果はそのことと無関係ではないと思う。また、「玄関先の階段に立つ少年」が授業で2番目に人気があったが(挙げた者＝7)、この作品は展覧会の広報用CMに頻繁に登場し、事前授業ではそのスライドが映った瞬間、大きな歓声が上がった。ポスターもCMも予備学習的側面を備える視覚伝達メディアであり、事前授業と似た側面をもっている。ここで確認された結果は、予備学習が児童の関心を高めることを例証するものであり、それゆえ、予備学習が児童に先入観や偏った価値観を与えるものであってはならないことを痛感した。

3 事後授業(図12、図13)

事後授業は2教室に分かれて同時に実施した。最初に両教室で、静屋が「美術館に行って、本物が見られてよかったと思う人?」と質問すると、全員の手が挙がった。

授業では、まずワークシートの3「全体的な感想をまとめよう。」と4「バウル・クレーさんへ手紙を書こう。」の2項目を記入してから、感想・意見の発表の場を設けようと思ったが、時間制限があるため、後者の時間は縮減せざるをえなかった。前節で紹介した児童は、上記の2項目について次のように書いている(原文のまま。図6参照)。

3：「いろんな絵を見て、バウル・クレーさんが、なにを見る人につたえたいのか、分からないのがちょっとあったけど、最初にたてた、目標どうり、絵を読むことが少しだけできたんじゃないかな?と思った。」



図8 展覧会鑑賞Ⅰ：美術館に到着した児童に歓迎の御挨拶をされる、足立副館長。



図9 展覧会鑑賞Ⅱ：吉鶴先生の周りに児童が集まり、作品の前で質疑応答と歓談が展開。



図10 展覧会鑑賞Ⅲ：岡田・児童の巡回鑑賞の1場面。「二重テント」の鑑賞。クレーが描画後、画面を縦に半分に裁断し、両側を高さを少しずらして接着・構成したことを、岡田が児童に解説。



図11 展覧会鑑賞Ⅳ：2階会場の「バルナッソスへ」の前に陣取り、ワークシートの課題に取り組む児童と、全会場を巡回しながら指導にあたる静屋。

大雨という悪条件であったが、幸い学級担任の中野先生(1組)・吉鶴先生(2組)が児童の引率を御援助してくださり、また、受講生も基本的指導に加わったので、美術館にスムーズに移動することができた。なお、美術館で帰りの集合時間を確認しなくてはならないので、児童には特別に腕時計をもってこさせた。

美術館への移動は、これから本物に出会えるのだという児童の期待・緊張感を高める、1種の演出効果をもっていただろうと思う。児童は入口前で足立明男副館長の歓迎の御挨拶を聞いてから、美術館に足を踏み入れた。壁面に整然と並ぶ作品群、展覧会場の静謐で1種荘厳な雰囲気、展覧会に来た喜び・感動をより大きくし、児童は眼を輝かせて作品鑑賞に臨んだ。

各自の観点や事前授業で学んだ鑑賞主題に基づき、最も興味・問題意識を覚える作品を捜しながら、主体的な鑑賞活動を展開・構築するために、80分の鑑賞時間を保証し、見る順番は自由とした。児童が展覧会場で行う主な課題は、持参したワークシートに、授業で見た25点、展覧会で見た269点の中で、1番気に入った各1点を鉛筆・色鉛筆等で模写し、その感想を書くことである。鑑賞の仕方に個性があり、足早に見る者、1人で黙々と見る者、友達や指導者・受講生達と感想・意見を語り合いながら見る者等がいた。児童は1通り鑑賞してから、上記課題に入ったが、この活動の様子も様々で、ある者は実物を眼

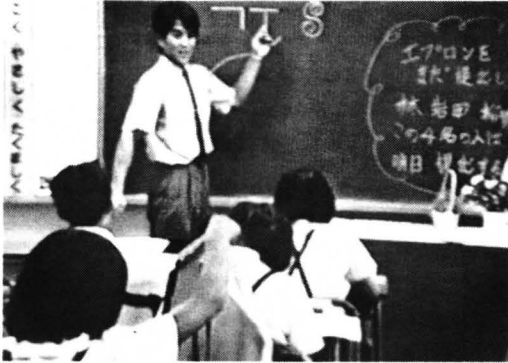


図12 事後授業Ⅰ：クレーの基本的な造形言語を解説。

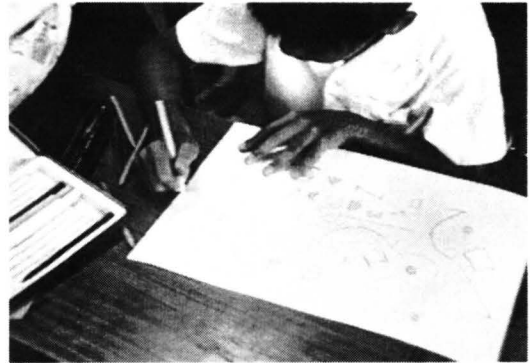


図13 事後授業Ⅱ：展覧会で学んだ諸種の記号類を駆使して、「クレーさんへの手紙」を表現。



図14 「クエスチョン?」児童作品 1994年 鉛筆・色鉛筆、定規・コンパス、画用紙(8ツ切り)、描画部分20.5×21.4cm

4. 「パウル・クレーさん、私は、クレーさんの絵をみて、いみがわからないのが、少しあったけど、クレーさんの絵は、見る人が、たぶん、だれもみんな、「すごい」というと思います。クレーさん、私は、クレーさんの絵が、好きです。」

次に新しい試みとして、鑑賞から表現への有機的な展開を試みる、前述した「クレーさんへの手紙」と題する表現課題を实践した。1. 鑑賞で学んだ諸側面の確認と再認識、2. 表現課題を通してのクレーの絵画表現の追体験、3. 抽象画の理解が、表現課題の主たる目的である。具体的には、各種のモチーフ・表現様式や色を使って、クレー的表現を試みるという展開を図った。静屋は板書しながら、数種類の記号の意味や直線・曲線の性質等について解りやすく解説し、線や四角形や丸、または、模様等を使って、自由に何を表現してもよいとした。4ツ切り画用紙を準備し、鉛筆・色鉛筆・クーピーペンシル等、簡便な描画具で描くこととし、定規・コンパス類の使用も認めた。

ある児童は、鑑賞の成果を満載した、「クエスチョン?」と題する絵(図14参照)を描いた。そこには、戯画的な人物、クエスチョンマーク・矢印・階段・植物紋様のな曲線等の諸モ

チーフ、簡単な図形、また、表現法として、色帯のグラデーション、モザイク様の格子模様、色面のほかし、諸要素の反復、エキゾチックな風景画様式etc.を認めることができる。これらすべてがクレイ芸術の基本語彙を意味し、児童はその語彙で語彙の考案者であるクレイに手紙を書いたことになる。画用紙の下側に、児童はその絵の表現意図を次のように解説している。

「バウル・クレイさんの絵はほとんどがわけが分からないものが多かったけど、その絵の中に使っているいろいろなマークや線は、クレイさんの心の内を表していると思います。上の絵は、そういう思いでかいた私の心の内の絵です(原文のまま)。」

今回は、読解面にウェイトを置く鑑賞授業を構想したが、「作品と対話するかのよう深い思索(第5：解釈の段階。Ⅲ-4参照)」を実現するには、基本的には知的理解だけでは不十分である。今回のように、鑑賞活動の後、鑑賞を補う形で表現課題を設けたり、また、鑑賞作品に関連する先行体験的な表現活動を実践したり、さらには両者が複合する題材を実施したりすることで、鑑賞・表現間に多くの種類のリンクができることが理想的である。したがって、今回、実施した表現課題が、鑑賞授業の単なるまとめのレベルを越えて、その体験が起点となり、表現・鑑賞の両活動が多様に発展していくことを期待している。

Vプロジェクトを通しての包括的考察

本章では、鑑賞教育プロジェクトの活動実践を基に、鑑賞教育に関する諸側面を論じ、その論をもってまとめにしたいと思う。

鑑賞授業の構想にあたり、第1に考えなくてはならないのが、児童の資質・能力や見方・価値観・嗜好傾向や学習態度等の発達実態である。内容・方法的に優れた鑑賞題材であっても、発達実態を無視したものであっては、実際の授業場面で机上の空論と化してしまう。そこで、今回は、前述した鑑賞能力の発達に関する理論を踏まえ、「第1：物語の段階＝思いのままに感じ味わう」から「第2：構築の段階＝絵を読む」という成長の流れを考え、⁽²⁰⁾発達の観点から見て無理がない鑑賞授業を計画した。

ここで問題になるのが指導形態である。今回、岡田・静屋が選んだのは、「美術史学習」ではなく「主題学習」である。

美術史学習は、美術鑑賞にはある一定の基礎的な知識・理解が必要だという前提に立つが、教師側からの知識の一方的教授に陥りやすく、児童の諸実態が考慮されにくいという問題的側面をもつ。その形態は、学習者が知的側面への関心や問題意識をもちだす、次の発達段階で実施するのが妥当であるように思える。

美術史学習と主題学習とでは、知識・理解の位置づけが本質的に異なる。主題学習の基本構造は、自己教育的な活動展開をベースにして、1. 自由な鑑賞(着眼・発見や連想・想像活動etc.の尊重)→2. 主題・観点の学習→3. 作品の詳細な観察と読解→4. 自ら知識に向かう活動となる。つまり知識・理解は、学習者が自己設定すべき課題として、活動の最後に来るのである。主題学習では、知識・理解面よりも関心・意欲・態度面をより重視し、児童が自ら考え解釈し価値判断することに重点を置く。その観点は、児童側に立った指導実践の重要性を唱える、新学力観の骨子に適うものである。

実践では美術館での展覧会鑑賞を計画したが、児童が一見難解なクレイの絵画表現を敬遠せずに、主体的態度で諸側面を理解しようとするためには、予備学習段階で作品を見る基本的な主題・観点を学ぶことが必要であると考え、今回は特に事前授業の重点化を課題とした。事前授業を経験せずに展覧会に臨んだ場合には、恐らく大多数の児童が重要な諸点を見落とし、作品の前を素通りしてしまうだろう。主題・観点と明確な課題意識をもっての有意義な鑑賞活動の実現が、事前授業の主な目的である。また、関心を広げ、見たい

という活動意欲を喚起し、鑑賞を深く動機づけるといった、関心・意欲・態度面に関する事柄も、事前授業に課せられた目的の1つである。

今回の鑑賞授業では、クレーの絵画表現の特質を考え、主題学習の中心的活動を絵を読む活動、すなわち読解とし、その展開を展覧会鑑賞の主眼とした。ここで言う読解とは、作品の外観を眺めるだけの表面的な鑑賞ではなく、その表現世界に深く潜入して、調査・^{コンセプト}探索的活動を展開し、そこに何層も堆積している様々な思考・価値観を発見し読み取ることである。読解の試みは、クレーの場合に限らず、他のあらゆる芸術表現の鑑賞にとっても有効である。

ところで、読解をコアとする鑑賞活動が、実物を前にして実践できたことには大きな価値があった。実物鑑賞の実施は、実際には場所的・時間的制約があつて簡単ではないが、本物との対面、それを間近に見て味わえることは、児童の鑑賞意欲を最も高め、鑑賞の大きな喜び・感動をもたらすものである。近年、図録・画集・美術雑誌等には精巧な図版資料が掲載され、また、写真・スライド・ビデオ・レーザーディスク等の諸視聴覚メディアが普及しているので、それらを使った鑑賞授業の実践は無論可能である。だが、その実践は実際の人物を1枚の写真だけで判断するのと実は同じことを意味するのであり、考えようによっては無謀な試みでさえある。実物鑑賞に勝る鑑賞の形態はないというのが結論である。

国立近代美術館で数々の展覧会を企画・運営してきた、藤井久栄氏は、「予備知識が多少は必要でしょうが、まず、実物を見せること、説明はその後ですればいい⁽²¹⁾」と、実物鑑賞の意義を述べている。静屋もまた、2度の鑑賞授業実践を通じて、「実物の持っている価値に直接関わりを持たせ、コミュニケーションさせることはより大きな効果が期待できる⁽²²⁾」という考えを深め、実物鑑賞の意義を確信した。

最後に、事後授業で試みた、鑑賞を表現にリンクする試みについて意見を述べたい。同種の優れた授業実践は他にもある。「グッゲンハイム美術館名品展」(1991年6月20日～9月1日、セゾン美術館)を鑑賞モチーフにした、「あそびじゅつ—子どものためのモダン・アート」は、実物鑑賞をコアとする組織立った鑑賞教育の先駆的事例である。この活動に関わった、竹沢丈子先生(東京都北区赤羽台西小学校[平成3年当時])は、1. 事前授業：13種類のツールによる予備的な体験学習、2. 美術館での展覧会鑑賞、3. 事後授業：ジャクソン・ポロック「魔法の森」を下敷きにした現代美術体験を目的とする表現課題、という形態・⁽²³⁾構造の鑑賞授業を構想し実践した。3段階の授業展開だけではなく、最後に表現課題を設けている点が、岡田・静屋の今回の実践と同じである。

これまでの鑑賞指導では、表現活動の導入・まとめの段階で、関連する参考作品を数点選んで鑑賞するというタイプが多かったように思う。その試みも確かに重要だが、この種の実践が形骸化して、「表現が主、鑑賞が従」という固定観念、平たく言えば、鑑賞は表現のオカズだという考えが広まることは問題である。

そこで、鑑賞の重点化が課題になるのだが、それは上記関係を単純に逆転させることではない。その点の考え方については、次の3つのポイントがあると思える。

- ①鑑賞領域独自の意義・重要性を認識すること。
- ②①の認識を踏まえ、鑑賞の補助的・付随的位置づけを脱して、独立的な鑑賞指導を展開すること(高学年の指導課題として、学習指導要領に明記)。
- ③鑑賞教育の発展の過程で、表現・鑑賞の多様な関係を構築すること。

今回の実践では、上記3点を配慮し、事後授業では鑑賞体験をより深める目的で、表現・鑑賞のリンクを試みた。表現・鑑賞の関係については、表現・鑑賞が両者間を往復しながら相互発展することが最善である。低・中学年の造形遊びの諸活動を先行体験とする、現

代美術の鑑賞⁽²⁴⁾や、鑑賞で得た諸コンセプトによる表現活動の展開(当授業)、また、両者が複雑に有機的に合体した活動等、多様な授業形態の試みがあつていいと思う。

そうした試みの1つとして、「クレーの絵に音楽をさがそう」と題する題材を構想することも可能である。そこで、その覚書・概略をここに記しておきたい。

(1)事前授業

a.導入的な話：クレーの音楽的才能(プロ級の腕前のヴァイオリン演奏etc.)や恵まれた音楽的環境(父親が音楽教師、母親がオペラ歌手、妻がピアニスト)等について簡潔に解説。

b.スライド鑑賞(絵画・音楽間の諸種の相関を学習)⁽²⁵⁾：画面の構成要素であるフェルマータ・五線譜等の音楽記号、線の動き(1筆描きの表現)⇔旋律や運弓・楽器演奏、諸要素の反復・増殖⇔リズム、グラデーション⇔音の漸次的・連続的变化、複数の色の同時対比⇔
ポリフォニック
和音や多声構造的な調べ、色の空間⇔音響etc.

(2)展覧会鑑賞

(3)事後授業：音楽感想画(音楽を聞いて絵を描く課題)⁽²⁶⁾の実践

なお、鑑賞教育プロジェクトは、次年度も別の展覧会を鑑賞モチーフを選んで展開していこうと考えている。今回の鑑賞授業を通じて、1人でも多くの児童が、鑑賞の面白さに開眼し、美術を愛好する習慣を身につけ、将来、ベルン美術館を初め、各地の美術館・画廊等でクレーの諸作品に再会することを心から願っている。

*

鑑賞教育プロジェクトの趣旨を御理解してくださった、山口大学教育学部附属山口小学校の岡村豊太郎校長・安村俊輔副校長、当授業のために時間割を調整して下さり、また、悪天候かつ公務御多忙の中、児童の引率、会場での指導・監督等に当たって下さった、同校の中野政彦・吉鶴修両先生、前年度同様、当活動を全面的に御支援して下さった、山口県立美術館の足立明男副館長、題材開発に役立つ着眼・示唆を与えて下さった、同館の斎藤郁夫専門学芸員、美術館教育関係の貴重な諸資料をくださり、演習活動とプロジェクトの推進を援助して下さった、広島市現代美術館の岡本芳枝学芸員の皆様に、誌面を借りて厚く御礼申し上げます。

注

- (1)岡田匡史・静屋智「鑑賞教育プロジェクト(『美術科教育特論演習Ⅱ』課題)―「アメリカの遺産―絵画の150年」展(山口県立美術館)の題材化」『美術教育学』第15号、美術科教育学会、1994年、pp.83-104.
- (2)Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴと集計・作表を岡田が、Ⅳを静屋が担当。最後に岡田が責任をもって補筆・修正と全体の構成・編集を行った。
- (3)Instructional Resources: Vas Prabhu, "Contemporary Art: Familiar Objects in New Contexts." *art education*, vol.43, no.4, July 1990, pp.25-32.
- (4)岡田匡史・隅敦・小田村泰彦・伊藤和子「「パウル・クレーの芸術」展(山口県立美術館)をもとにした鑑賞指導の試み―3つの学習指導計画」『山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第5号、1994年、pp.127-154.
- (5)岡田匡史・静屋智「第2回 鑑賞教育プロジェクト―「パウル・クレーの芸術」展(山口県立美術館)の題材化」(第16回美術科教育学会、1994年3月28日、信州大学)『第16回美術科教育学会 信州大会 発表概要集』p.4.
- (6)a.岡田匡史「鑑賞教育の新しい展開」(山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター

- 「授業研究グループ」第4回例会、1994年1月20日、同センター会議室)
- b.岡田匡史「子どもの美術鑑賞—「ミュージアム・アドベンチャー」と学校教育の鑑賞教育」(第27回広島芸術学会例会、1994年2月19日、ひろしま美術館講堂)「広島芸術学会」報27、p.8.
- c.静屋智「ひとりひとりの発想を生かす鑑賞の授業」(第55回初等教育全国協議会、1994年2月5日、広島大学附属小学校)「第55回初等教育全国協議会研究集録」pp.122-124.
- (7)Hans Christoph von Tavel, “Zum Geleit.” ハンス・クリストフ・フォン・ターフェル「ごあいさつ」編集：愛知県美術館(寺門臨太郎・拝戸雅彦)、山口県立美術館(斎藤郁夫)「パウル・クレーの芸術(図録)」愛知県美術館・中日新聞社、1993年、p.6.
- (8)展覧会は、クレーの活動歴を基に、以下8つの時代区分を設けて構成された(図録参照)。
- 1)1899-1910年、2)1911-1914年、3)1914-1920年、4)1921-1924年、5)1925-1931年、6)1931-1933年、7)1934-1936年、8)1937-1940年
- (9)前掲論文[4]参照。
- (10)岡田匡史・静屋智「第2回 鑑賞教育プロジェクト—「パウル・クレーの芸術」展(山口県立美術館)の題材化」「第16回美術科教育学会 信州大会 発表概要集」p.4.
- (11)Paul Klee, “Schöpferische Konfession.” 1920.(雑誌「芸術と時代の演壇」に発表)パウル・クレー(岸野悦子訳)「線描芸術について—創造的信条告白」訳者代表：土肥美夫「表現主義の美術・音楽」ドイツ表現主義4、1971年、p.171.
- (12)クレーは子どもの表現の真価を賞讃し、日記(1912年、番号905)に次のように書いている。「つまり、私のみるところでは芸術の太初ともいべきものがある。そして、それはむしろ民族学のコレクションや、子供部屋に見出されるものなのです。読者よ、笑い給うな!この根源的な芸術は子供でもできることなのです。そしてまさに子供でもできるということに、叡智がひそんでいるのだ。」“Tagebücher Paul Klee.” Verlag M. DuMont Schauberg, Köln. 南原実訳「クレーの日記」新潮社、1961年、p.292.クレーの児童芸術観については、Felix Klee, “Paul Klee.” Diogenes Verlag Zürich, 1960.フェリックス・クレー(矢内原伊作・土肥美夫共訳)「パウル・クレー—遺稿、未発表書簡、写真の資料による画家の生涯と作品」みすず書房、1962年、千足伸行「原点への回帰—クレーと児童芸術」千足伸行監修「没後50年記念 パウル・クレー展(図録)」産経新聞社、1989年、pp.26-39.を参照。
- (13)a.岡田匡史「子どもの美術鑑賞Ⅰ—「ミュージアム・アドベンチャー」と学校教育の鑑賞教育」「藝術研究」年報第7号、広島芸術学会、1994年、pp.1-19.
- b.岡田匡史「子どもの美術鑑賞Ⅱ—「ミュージアム・アドベンチャー」と学校教育の鑑賞教育」「山口大学教育学部研究論叢」第44巻・第3部、1994年(9月5日に投稿予定)
- (14)op. cit.,[3]p.31.
- (15)三浦由紀子先生(山口県徳山市立小畑小学校校長)と日高幸子先生(福岡県直方市立上頓野小学校[平成2年当時])による、「絵の手紙」の指導実践を諸観点から考察した、西光寺亨「絵で見る子どもの生活—低学年の新しい指導法」教育出版、1990年、を参照。
- (16)岡本芳枝「「美術館教育」の現状—NYの研修に参加して」『中国新聞』文化欄、1993年4月26日朝刊
- (17)前年度の集計結果：○絵を見るのが好きな子：54%、ふつう：46%、きらい：0%
前掲論文[1]p.88.
- (18)以下は、事前授業のOHP鑑賞の冒頭で、静屋の質問に対し、すでに展覧会を見た3人が答えた、展覧会の感想である。
- a.「最初の初めの方の作品は解った。でも、だんだん解らなくなってきた。」

- b.「初めの内は絵とタイトル(の関係(記録者補足))が大体は解ったけど、後の方は初めの内と違った。点々みたいな感じで書いてある絵とかがあって、よく解らなかった。」
- c.「わけが解らなかったけど、いろんな細かい点があったけど、楽しかった。」
- 上記感想から解るように、予備学習がないと、概して児童は鑑賞の多様な観点・アプローチを選ぶことができず、「解る／解らない」や「好き／嫌い」といった慣習化した価値基準で、作品を一面的に見がちとなる。

- (19)この授業場面は、「親と子の美術講座—パウル・クレーの人と作品」(1993年6月12日、山口県立美術館講座室)における、斎藤郁夫専門学芸員の同作品の解説を参考に考えたものである。
- (20)第6学年でも、その鑑賞能力の発達段階は、「第1：物語の段階」であると考えられる。児童が作品を前に最初に試みることは、一般に知的読解ではなく、生活体験や日常的な知識・解釈をベースに展開する、想像・連想・類推等の活動である(表3参照)。
- ⑰「美育インタビュー：筑波大学教授藤井久栄さん」『美育文化』第42巻・第11号、財団法人美育文化協会、1992年、p.11.
- ⑱静屋智「ひとりひとりの発想を生かす鑑賞の授業」広島大学附属小学校編集「第55回初等教育全国協議会研究集録」1994年、p.124.
- ⑲竹沢文子「グッゲンハイム美術館展のアートツーリングを実践して」『美育文化』第41巻・第9号、財団法人美育文化協会、1991年、pp.30-35.
- ⑳岡田匡史「造形遊びの17類型をもとに鑑賞教育を構想する試み」『山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第4号、1993年、pp.137-143.を参照。
- ㉑クレー芸術と音楽の関係については、Andrew Kagan, “Paul Klee/Art & Music.” Cornell University Press, ITHACA AND LONDON, 1983.アンドリュー・ケーガン(西田秀穂・有川幾夫共訳)『パウル・クレー／絵画と音楽』音楽之友社、1990年、を参照。
- ㉒音楽感想画の実践・理論については、下記の諸論を参照願いたい。
- a. b. c.の掲載誌：『美育文化』第39巻・第11号、財団法人美育文化協会、1989年
- a.石川由里子(熊本大学附属幼稚園)「音楽と造形を融合させた表現活動」pp.24-27.
- b.佐々木薫(東京学芸大学附属小金井中学校[平成元年当時])「音楽鑑賞画」の中で生きる子どもたち」pp.36-40.
- c.岡田匡史「音楽と絵画の相互交流に関する試論—音楽感想画を中心に」pp.18-23.
- d.岡田匡史「音楽感想画の考察—絵画と音楽、両表現の相関」『美術教育学』第11号、美術科教育学会、1990年、pp.249-261.
- e.岡田匡史「音の形態化の基礎理論」『美術教育学』第12号、美術科教育学会、1991年、pp.77-94.